

松浦佐用媛石魂録

前編

壹

913.5
マ
前編 1

曲亭主人著
溪齋英泉画

松浦佐用媛石魂錄

東京金玉出版社

天平二年七月十一日筑前國司山上憶良
謹上

大伴佐提比古郎子特被朝命奉使藩國
棹言歸稍赴蒼波妾也松浦佐用而嗟此別易歎
彼會難即登高山之嶺遙望離去之船悵然

斷肝黯然銷魂遂脫領巾麾之傍者莫不流
涕因號此山曰領巾麾之嶺也乃作歌曰

得保都必等麻通良佐用比米都麻
胡非爾比例布利之用利於返流夜
麻能奈



領中 鹿山考

領中鹿嶽。肥前國三根郡。濱崎の南にあは。むりー大伴挾提彦が妻松浦佐用媛この山に登り領中と脱て。その夫の高麗小使をる船と鹿一所なりといふ佐用媛の事國史經籍小見えむと雖も最古より云傳たるふや。萬葉集卷五ふ山上の憶良小松浦の歌三首。領中鹿の嶺を詠むる歌一首。後人追和の歌四首。三島王 追和の歌一首。をべて九首。佐用媛の事と詠む。去れども歌の巷談街説をとつて。尋出る事おほうめれば。國史小合さるもあり後生推量の説をもて云とたれ。當初漢土の望夫石状思ひよして。領中鹿山の名と説さる歟。又和漢同日の談歟。思ひあさまへ難し。彼望夫石と云もの。貞婦其夫の役一行小戀死して化して石とありーよの非む。江山の自然石。人の立望が如たものを斥て望夫と命る事。詩文者流のわざくれあるよ。程伊川の説を引く。鎌倉志ふいへり。悪接むるふ。望夫石の事。幽明録ふ出づ。又石ならずでも。望夫と名づくるもの。忠州望夫樓。又望夫臺あり大明一統志小見ゆ。又述異記小載をる。想思草。五雜俎小見えさる。石雄風。みお望夫石の故事の如。亦是小

説者流の寓言の。怪む足らむ。おもふ。我邦西國の海濱も望夫石と稱るもの。間こまあり。又鎌倉龜谷の石切山小望夫石あり。志ふ云。畠山六郎重保。由比が濱小て戦死を。その婦この山小登り。望見く戀死。終小化して石とありたり。と云傳ると。枯骨の化石もなたふあらねど。和漢の貞婦。化して石となり。その全體と遺を事。いよく思ひあさまへ難し。かくまは領中鹿山の事も。推て去るべき歟。馬琴嘗按を於。日本紀欽明紀小見えたる。調吉士伊企辭が妻。大葉子が歌よく憶良が詠ふ似さ。疑らくは後人竊ふ大葉子が歌とどつて更ふ領中鹿山の名を設たる歟。こふ小數行と抄書して遺忘。備る事。おのれ博士ぶして強て應説とあまよしもあらねど。ある人小領中鹿山の事と問きて。うくの答つ。差らくは識者の物あらひあるべし。日本紀欽明天皇の紀小云。

天皇ニ十二年。遣大將軍紀男麻呂。副將河邊臣。瓊岳令討新羅。而其軍不利。時爲新羅所虜。調吉士伊企辭爲人勇烈。終不降服。新羅聞將拔刀欲

斬 逼 而 脱 禪 進 令 下 以 尻 骨 向 日 本 大 嚙 叨 曰 日 本
 將 齧 我 腕 雕 即 嚙 叨 曰 新 羅 王 齧 我 腕 雕 雖 被 苦
 逼 尚 如 前 叨 由 是 見 殺 其 子 亦 舅 子 抱 其 父 而 死
 伊 企 儼 辭 旨 難 奪 皆 如 此 由 此 特 諸 將 帥 所 痛 其
 妻 大 葉 子 亦 竝 見 禽 愴 然 而 歌 曰
 柯 羅 俱 爾 能 基 能 倍 你 陀 致 底 於 譜 磨 故
 幡 比 禮 甫 囉 須 彌 母 耶 磨 等 陞 武 岐 底
 或 有 和 曰
 アレヒトカヘシワダシテイハク

柯 羅 俱 爾 能 基 能 倍 你 陀 志 於 譜 磨 故
 幡 比 禮 甫 囉 須 彌 母 耶 磨 等 陞 武 岐 底
 八 月 天 皇 遣 大 伴 連 狹 手 彦 領 兵 數 萬 伐 于 高 麗
 狹 手 彦 乃 用 百 濟 計 打 破 高 麗 摘 以 上 要

こまをもておもふよ。この年天皇再び狹手彦と大將軍とあして高麗を討給ひたれば。
 伊企儼が妻大葉子が敵の城に登りて比禮甫囉須彌と歌ひてその夫と連聲せしと悞傳へ。
 狹手彦が妻佐用媛が事とせしよ。又人の異しして似たるよ。最不審きて言の序よいふ。
 前記を大葉子が歌柯羅俱爾能基能倍你陀致底の韓國の城上より立ててきて比例甫囉須彌
 母耶磨等陞武岐底の領中鹿隅も日本方向て也又クヘー歌の基能陸你陀陀志の城の上より
 立しな。比禮甫囉須彌爾那你波陞武岐底の領中鹿隅よ。浪速方向てといふな。領中鹿
 隅の領中と脱て鹿たるな。今俗のひれふして泣といふの訛ま。因よいふ。今の使者人
 と罵りてけつてもあやぶれといふ。けつは關東の方言肛門な。あやぶれば紙べしな。こ
 の面叱伊企儼が新羅王唱我腕雕と云しよ起る敷亦是古言の餘波な。笑ふべし且萬葉
 集憶良が歌の前よ出一つ。この人松浦を詠る歌よも。

麻 都 良 我 多 佐 欲 比 賣 能 故 何 比 列 布 利 斯 夜 麻
 能 名 乃 美 夜 伎 伎 都 速 良 武

石魂録前編目録

- 第一
- 第二
- 第三
- 第四
- 第五
- 第六
- 第七
- 第八
- 第九
- 第十

第一 祈ニ鏡神社いのりてかまのひ 社やに 行生みちごうまる

第二 陰陽贈答名いんよう ぞう ぞうして 初香はじめてかうばし

第三 不識取をしして 大得おほいにえたり 耻はがを

第四 詠ニ詩歌えいしてし 處女しよ ぢよ 舌戰ぜつ せんを

第五 猫才ねこざい 説ざん 奸被罪かん せら つみせ

第六 合あいで 涙なみだ 節婦せつふ 送おく 義男ぎなんを

第七 海濱失書かい べんしつしよを 得えたり 書しよを

第八 綿繡和歌わたぬい 召よび 邊將へん せうを

第九 龍神洞りゆう じんのおほらに 孤客こ かく 知命しるめい

第十 末龍華親族すえの たつ はかに 全聚から まつたてあつまる

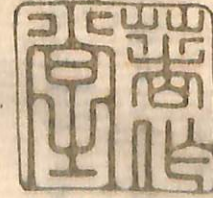
憶良おくらの鏡前かみづゑんの國司くにしにて。天平てんぱ年中彼處かゝに在任ざいにんせし人ひとふれば土俗どぞくのいひ傳つたるどころと聞きく。かく詠よめるあるべし。佐用さよひめ媛ひめが事ことい。今いまも節婦せつふの龜鑑きかんとて。これと稱讚せうさんも亦また大葉子おほはこが事ことに至いたる。い。あらざるもの多おほし伊企いせ憊あ夫妻ふさいの幸さいふたゝあらむや。

時

文化四年夏五月下浣書于魚俎橋畔之

兼笠軒

曲亭主人馬琴撰



可樂村旅



離別從來易淚流
那堪愁上更添愁
共拚愁到無添處
目斷腸枯淚也收

松浦佐用媛

泣く

涙の

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ



肥田四清

盡道神像
不易逢
誰知陸地
遇喬松
降魔不用
沙門杵
別有奇方
制毒龍

瀬川采女吉次



只道讎家起
禍因
誰知家鬼美
家人
本他刺客情
巨測
未必豫讓善
保身

牛淵九郎清繩



擬笑反
 成哭
 求榮而
 得辱
 難容五
 尺身
 誰憇斯
 惡木

鼠川嘉二郎
ねづがわのりゅうじょう



擬笑反
成哭
求榮而
得辱
難容五
尺身
誰憇斯
惡木



鼠川嘉二郎

只盡娥媚便可憐
塗鴉識字豈能傳
須知才女凌雲氣
吐出蓬萊五色蓮



瀬川采女妻
秋布

竹纜生

便直

梅到死

猶香

玉鳥



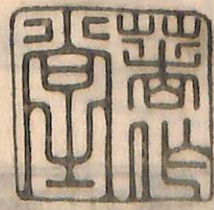
從來實禍起虛
名累日殃人
兩不情



かきまのひらうど
長城野兵太

こゝは著を草紙物語を浮萍の根おごとを種として水莖のおぼつうおた。いふへ人の澄濁まる事と説。善と獎一惡と懲らま。よほがとんがあとてまおれば。あげはらふ詩歌おども。伊勢物語の例おならひく。或は古きと今めかしく聞う。あるに近き状いよしへ曲いひうえさるもおほかり。時もあれ。夏の夜は短きおのが才をもて。ふかく思ひ。速く端る事はようせず。あくるよ易た窓の下ふ。あうらさほなる端書して。前編三冊の草紙とあ唐蓬大和言葉と名づくるもの。霜お後る。菊の操を義男節婦に比ていふ。又この書の一名と。松浦佐用媛石魂録ともいふべし。故いうふとなれば。領中庵山お妻をもとめ。望夫石上ふ子と生を發瑞とま。まかれバ瀬川采女の。後の秋手彦ふいて。博多秋布の。後の佐用媛とも見おし給ひね。

文化丁卯仲夏提月 曲亭主人再識



松浦佐用媛石魂録前編上卷

東都 曲亭馬琴編次



第一

鏡神宮お祈り狩と生む

肥前國上古の草北火國と号は蓋天草の海中に火あり。常お波上お燃ると。いくばくといふを知らず。これを不知火と稱ふ。和名鈔に。肥前と比乃三知乃久知と訓む。又肥後と比乃美知乃之利と訓む。肥といひ比といふ。まな火の謂あり。此國海お不知火あり。山に硫黄火多し。故に火の國といふ。まべく十一郡。其中に。松浦郡に彼杵郡の西ありて。海邊に属す。日本紀に。神功皇后の九年四月。火前國松浦縣お着御ありて。自ら祈て宣く。朕西のかと財國三韓おりともとめんと欲を。も一成ことあらば。魚に釣とのむべしとて。頓て竿とあげ給ふ。細鱗魚と得給へり。皇后よろこんで。希見物ありと宣ふ。これよりて。時の人其處を名づけて。めづらと稱ふ。今松浦といふに訛れりと見えたり。されバ萬葉集第五。

松浦川かひの瀬ひかり年魚釣るとた、せる妹が裳ぬれぬ

と詠るに。此故事と思寄せたる也。又當國三根郡ふ。領巾庵山あり。松浦ふ鏡神社あり。みな
佐用媛が事迹なりと云傳ふ。或に鏡の宮に。神功皇后。松浦山に登りて。手づから御鏡と安
置し給へるを神體とほと云。まかまども源氏物語。新古今集等。鏡の宮と詠る歌と見れば。
佐用媛が事迹とするうとおぼし。源氏たまうつらに。

君ふえし心とがひまつらあるかまの宮をかけてちういん
新古今紫式部家集に。

あひ見んと思ふ心のほつらなるかまの宮をそらにふるらん

是等の事よほきて。奇をた物語あり。今説出すと聽。人皇八十九代の天子。龜山院の御時。肥
前國松浦郡。御厨の郷ふ。瀬川健三道考といふ。武士の浪人ありけり。うの心ざほ正して。
篤實敦行せよ稀あり妻の名と木綿妙と呼く。肥後國葦北郡。水股の海邊なる。濱村の郷士
何がしが女兒へ。父母世と早くし親族もなかりしう。己死て夫よ貞節と盡して。半点も

関る事なし。抑瀬川健三が祖父。道次に往時壽永の頃。源平の合戦。毎度先登して。大

軍功ありしかば。頼朝卿すあにち相模國ふ于て。一處懸命の地と死行きし。二世將軍頼

家の時ふ。此の過あつ。忽地肥前國の松浦縣に配流さる。斯て後。道次が子。道村が時ふ。

松浦よて僅る田園と買求め。今の健三は傳り。去バ其家富ふにあらねど。衣食よ之にか

らす。夫の武藝文學を所行とし。妻は又和歌と嗜て。いと安らりよ世と送ぬ。斯て健三は年四

十ふ餘れども。子と云ものあうりしう。夫婦久しく是と歎くと雖も。この人力の及ぶべた

ふあらね。いかふともまべなし。さてある日妻の木綿妙。夫ふいへりけるに。吾們過世恐

くて。子を舉む。子孫是より斷絶せば。最歎かひし死事ならず。去バとて御身が胤をらぬ。人

の子と養ひて。木よ竹と接とらんや。心ひぬ所為なるべし。世の神佛の祈子と

云事も侍り。當處鏡神社に。靈驗新ふおのまほなれば。かかぬまでも。夫婦力と戮して。

祈り奉らむ。と云ふ。健三點頭。げに鏡明神に。佐用媛が所持の鏡と神体とするよし聞
ぬ。夫鏡の靈明よして。對へむ照らさすと云とおし。かくて夫婦が誠心と盡して祈らん。納

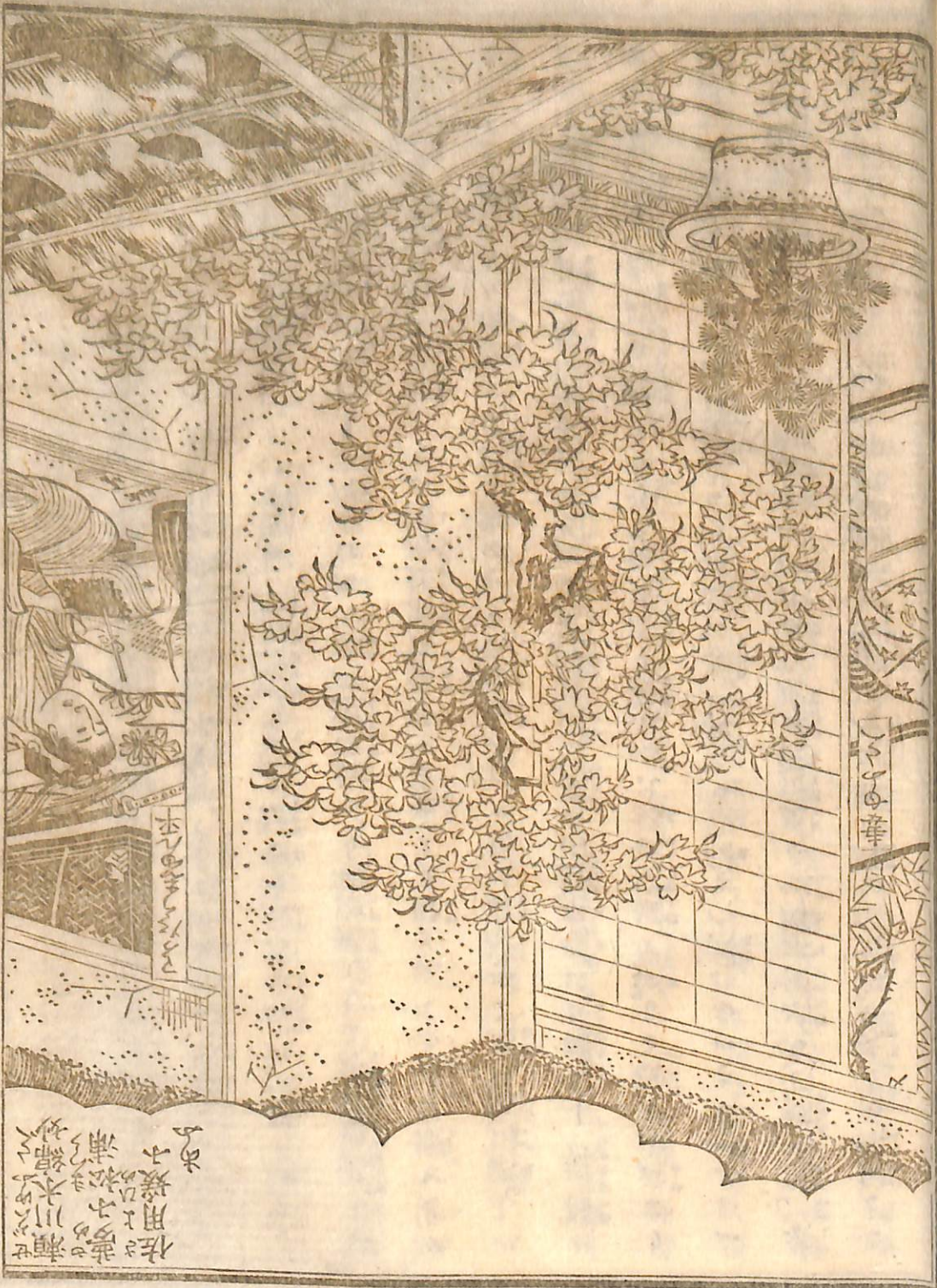
こと因縁あり。天その至誠と感ぐ。二人は子供を與給ふこそ。兄は家を嗣し、弟は母を養ふ。せよ。然ども。嫡室水綿妙も。生得氣血足らざれば。子と産難し。えし。妾と養ふ。宿願願ふ。かおふべし。さああれ。其人を得ざるとた。影の妾ありども。子の得がさし。又ろの人を得ざり。と云とも。初も似ず。嫡室嫉妬。心と發を時を。絶く子あり。愈。夫婦志を合して。七日が間。齊して。諸共に。領中尾山の麓に到れ。彼處に到る日。かあらず。薪と負たる賤女にあふべし。瀬川氏の爲。子と産べたる。この女子あり。その期に及ばず。露ばうり。疑を以て。彼が身と賤ひ。伴ふて。家歸きよ。生る。子供は。其性伶俐。からん。殊更に兄の文武の才。長されど。兄弟壯年。よして。厄難あり。これ命運の然ら。あむる所あり。己が言。旁々疑ふべうらず。と云かと思へば。遠寺乃鐘の音。枕響て。曉方近く。ぬり。けり。夫婦夢覺て。送見する。趣と物語る。符節を合を。がごとく。實は不思議の靈夢。あれば。且かこみ。且歡び。この疑ふべくもあらぬ。佐用媛の神靈。日采の祈願。と納受あつ。かく詭宣を。給ふ。ぬり。末世と雖も。信心の奇特あり。最尊し。と信だち。夫婦歡び。思ふ事。限なし。其時健三。の。つ。と。尋思。

受給いざる事のあるべからず。殊に松浦佐用媛の。欽明天皇の御宇。高麗と討し給ふ。大將軍を承りし。大伴連扶手彦が妻あり。扶手彦高麗へ行時。佐用媛痛く別を惜み。當國三根郡の高峯に登り。領巾を脱ぎ其軀を磨く。悲歎哀傷見るに忍びむ。傍なる人不覺。落涙。遂に彼山と名づけて。領巾磨の嶺といへり。これを磨くとも知てぞあるべし。佐用媛が夫婦の別と悲しむ。貞節の至りて。吾們子孫の絶んとを歎く。忠孝に係る所なり。去ば古へ人も。

銀も金も玉も何せんよ。よろづのたうら子よ。あかめや。

と詠り人としく子なれば。先祖への不孝。且國の爲に不忠なり。元來此身の愛欲のみにせざるに。監と神も一人間ありし。とたの悲しと思ひ比べ給ひ。何どう憐み給ひざらん。いざらば。心とひとつよ。して。祈願を奉るべし。是より夫婦諸共に。鏡神社の影を仰ぎ。肝膽と推し祈ける。既百日は満る夜。夫婦が夢。蟬蛻する美女。枕方立在花のごと。唇と開た。驚し似たる聲を發して。告て云や。善哉夫婦れもの。こらに子孫と祈る

こと因縁あり。天その至誠と感ぐ。二人は子供を與給ふことを。兄は家を嗣し。弟は母を養。せよ。然ども。嫡室水綿妙も。生得氣血足らざれば。子と産難し。えし妻と養。宿願願をかふべし。さにあれ其人を得ざるとた。影の妻ありとも。子の得がさし。又うの人を得ざりと云とも。初も似ず。嫡室城妬れ心と發を時を。絶く子あり。愈夫婦志を合して。七日が間。齊して。諸共に。領巾磨山の麓に到れ。彼處に到る日。かからず。薪と負たる。賤女にあふべし。瀬川氏の爲に。子と産べた。この女子あり。その期に及ば。露ばうり。疑を以て。彼が身と賤ひ。伴ふて。家歸まよ。生る。子供は。其性伶俐。からん。殊更に兄の文武の才。長とれど。兄弟壯年。して厄難あり。これ命運の然らむ。所あり。己が言。芳々疑ふべし。と云かと思へ。速寺乃鐘の音。枕響て。曉方近く。取りよけり。夫婦夢覺て。送見する。と物語る。符節を合を。ごとく。寶に不思議の靈夢。あれば。且かこみ。且歡び。この疑ふべくもあらぬ。佐用媛の神靈。日來の祈願と納受あつ。かく詭宣を給ふ。取り末世と雖も。信心の奇特あり。最導しと信だち。夫婦歡び思ふ事。限なし。其時健三。つら。と尋思。



佐田川
 用子
 松木
 浦
 第
 小

入
 小
 の
 華



高
 千
 代
 の
 御
 衣

て木綿妙に云やう。神の告善と雖もわれ弱うりしより色と好まず。御身又樂で淫せむ。夫婦の間睦いければ。今日に至るは。面を報うせし事もなし。加藤。富貴榮耀の身もあらで。妾と養んの驕るは似たり。是れが志は非すと云ふ。木綿妙の聞もあへむ。何れ心も得ぬ事と宣ふら。己らに年米つれそひ侍まじ。過世あいくく。子と産む。七去とやらん子なれ。妻の去といわむや。然るを。お不最惜給ふことあら。今親族もなくありて。歸る小家のあらぬ故あるべし。斯はで夫は功なれもの。影護おぼして神の告さへ用ひ給はんとあらば。己が身ありとも何ういせん。速は身の暇を給はりて。ともかくもあり侍らんと云。其氣色思ひ定めたりと見ゆるは。健三はふかく感激。げお思ひ恨ぬ。一旦妾と養と云ども。子だに産いなバ。その家おかへまう。もし親族なれものあらバ。他お遣嫁まるとも。最易うるべたれど。そおを聞。異妻を襲るは。何とやらん心お快かろで。今のごとくに聞えしなり。ぞいゝる。うへい。黙止がさし神の告お從ひ奉るべしと。應いかバ。木綿妙ふうく歡び。次の日より。夫婦齊まると七日お及び。さて健三は。今茲十五ふなりける。若黨村澤俊平と云を

のふ。緣由と説知して。是お家を守らし。夫婦うちつれだちて。領中庵山へ赴きぬ。時。文應元年。三月四日。彼俊平と呼るもの。効たより。孤まてありければ。健三夫婦ふかく憐み。吾使ふ程は。彼又庇仄の恩と知て。信々お仕々るまじ。健三はこれ。手習らひせ。太刀合まるとも。教たり。かくて。瀬川夫婦も。松浦と旅だち。日影がたころの。漫行。一は。心さの。おく。ゆた。て。三根郡。領中庵山。乃。麓。着。その次の。日朝。は。だ。た。より。對。籠。を。用。意。し。く。旅。宿。を。立。出。終。日。山。の。ゆ。ぐ。り。と。彼。此。と。徘徊。ま。る。ま。日。も。稍。西。に。傾。た。て。暁。昏。近く。ぬ。り。ま。け。れ。ど。絶。く。一。人。の。女。子。も。逢。む。こ。い。不。審。ま。さ。く。と。詫。言。と。蒙。り。た。る。ま。こ。に。至。り。其。兆。と。見。せ。給。ひ。ぬ。い。う。ぬ。る。事。ぞ。夢。の。五。臟。の。煩。より。成。と。い。へ。バ。よ。し。な。れ。と。う。だ。の。ゆ。て。却。物。を。思。ふ。なる。誘。給。へ。暮。ぬ。間。は。昨。夕。歌。り。し。旅。宿。は。行。く。今。一。夜。と。あ。う。し。翌。日。松。浦。へ。歸。る。べ。し。年。弱。さ。もの。家。を。守。ら。ま。れ。バ。心。も。ど。お。と。云。ふ。木。綿。妙。は。最。本。意。なく。て。暮。る。を。惜。め。何。と。ぬ。く。歸。る。に。足。の。進。み。う。ね。く。夫。婦。後。ま。り。先。に。ぬ。り。舊。の。旅。宿。へ。赴。き。ぬ。浩。處。は。濰。手。の。山。道。より。葉。を。履。む。る。賤。女。年。の。二十。乃。う。へ。と。半。過。さ。り。と。見。え。ぬ。海。松。

玉嶋小郷導
甘んじて健三
夫婦濱添
宿所小来る



す。又親同胞もある事を聞かず。去る年。人内經紀がこの里へ將て来れるなり。己の里の長と
 をぬるに。さる不正事と聞て捨おくべきはあらねば。件の人内經紀を捕へ。縁故を穿鑿し女
 子は親里を問へ。送り歸らるべく思ひたるは。彼と拐擧に時ふ。豈 刺さどとや飲いた
 りけん。絶く一言も、の云とあし事此爲体不便なれば。女子とて家ふとめて下女とあし
 これと玉嶋と名づけたり。されど縁故分明あらざるよつて。己ことと得む。五駄の薪を
 人内經紀よとらしく。放やりぬ。然るは玉嶋や、かの毒氣解く物と云とと得たれば。其来
 かとと問し。如此く。歸るべし家も何らすといふ。彼の誠心あるものにて。野山の解
 ち。人よ勝きてようまるなれば。放遣らん事。便なく思へども。鏡の神社の記宣よつて所
 町寧ふ聞え給ふを。推辭やさんの。最もかこし。彼だに異議なくば。往し人内經紀よとら
 たる。薪の價と給ひるべし。進らせ候いと。回答。玉嶋を見うへり。汝この客人よ伴きて。
 松浦へ行べしと問ふ。玉嶋答く人の婢妾とぬらん事。願ひからす待れども。往し家公乃
 庇ふよらすば。おほ劣たる。遊女なるべかり。知。あうるよ再び此身を賣て人内經紀よとら

一給ひし薪の價と積んぬ。元よりの志。ふ侍りといふ。於是談合一決。健三水綿妙が
 歡び斜ぬらす。主人が云ふ任ま。玉嶋が身價と通與し。なほこの外。當坐の謝物として一
 封の銀子と贈りければ。濱添とらむして。これにて玉嶋が衣服を整。この夜の健三夫婦を留
 て。厚く款待けり。さて健三水綿妙の。次の日早飯米。後。濱添ふ列と告。玉嶋と伴ふて。松浦
 縣ふ立歸るに。玉嶋の。主人夫婦に。年采の庇と歡び聞え。傍單の男女ふも。ひとりく。に辭
 列し。裳を引折。草鞋穿しめて。諸共に立出けり。か、りうば玉嶋の。松浦ふ到より。健三
 夫婦の誠心を盡して仕るふ。木綿妙を露むりも。垢と思ふ氣色ぬく。これを憐む事。骨
 肉ふ異ならず。されば。鏡神社の冥助ふよりけん。玉嶋のその月より有身。十二月月上旬に
 安産せり。健三も木綿妙も。彼が氣色存て見ゆる。こゆより。起居ふつけて。心を用ひ。まをく
 神慮の違ざると尊み。信心。懈ことぬり。産まざる子の男ふて。あうも存あり。う
 ば。深く歡びて。初生と兄と定めて。松太郎と名づけ。後。ふ生まると弟と。浦二郎と呼び。日
 子経て。鏡神宮へ宮參り。さ。子供ら。久後と祈。塵さへをえを。養育。母の乳房。一か

らざりければ。二人の子どもを。まぐように肥立く。うの容止の似たる事。一願の珠を雇たる
がごとし。這へたて。立歩行めと思ふが。世の中の親心なるふ。木綿妙の。己が産する子
の思ひをわいて。とふかくに玉島をさへ勸まば。玉嶋も。又子以産てもいよく己と卑して。木
綿妙状敬冊くこと。初に勝まり。今茲は是彼ふ。羊の暮るくも早く覺文應の只一年に盡
く。弘長と改元ありけり。明きは弘長元年の春。鎌倉ふの。前執權北條相摸守時頼入道。ま
づから諸國の守護頭人等が。奸曲扱扱民の心と知んとて。世ふの病氣と披露まつ。密々に
國々で行脚し給ひけしが。九州ほでも押さりて。瀬川健三夫婦が徳行を知給ひけしふや。
弘長二年の秋。鎌倉に立歸りて。善と舉惡と罰し給ふ叙ふ。肥前國松浦縣の浪人。瀬川健三
道孝。速し妻子と俱まゝ。鎌倉へ參るべたよと。彼國の守護ふ仰つうのされたり。斯く瀬
川健三の思ひもかけを。俄頃の召よよつて。とれものも取あへむ。行装を整るに。木綿妙の
云も更ぬり。玉嶋俊平等是を祝して。用意既ふ整ひぬ。其時健三の妻と妻と呼びく云やう。
今度鎌倉へ召かへさる事。尤からざり吉事。一う於ふ。玉嶋は俱してはいらば。色と好む

の穢脱き難し。且此地ふの。父祖の墓もあれば。玉嶋に。二男浦二郎と屬て。殘去とめんと
思ふぬり。己が所持の田園其半の沽却して。路費と一半の玉嶋親子が衣食の料ふとらば
べし。元米少許の田園な於ふ。今又その半減むる時を。屋と潤をに足らすと雖も。餓状變ぐ
に便あり。且既ふ萬里と隔てり。再會絶て搦難し。永く別狀決まべしと云ふ。玉嶋はえう
くく應もせむ。涙さくくして居たりけしふ。木綿妙これ聞て。夫が對ひいうぬれば。か
く心づよた事聞え給ふ。平人のうへふても。妻一人妻一人のあるもの。今玉嶋を俱し給
ふども。誰う色と好むと思ひ行るべた。加之二人の子供等。今茲漸く三才なれば。何と
も思ひ己たまへぬ状。忽地ふ引分給ひ。玉嶋小物と思ひをるのみぬらす。彼等又物の心と
あるふ至りて。一人の父と兄状慕ひ。一人の母と弟と思ひ。さこそ形取くあるべけれ。宣ふ事
ふのあれど。是のみをうけ引難しと云ふ。健三頭状うち掉て。己が妻は言葉過てり。曩に佐
用媛の神靈弟の母ふ養せよと託宣ありしと忘れ給ひさる。歎これ元木石にあらざれば。ま
ま。得さる子供等と何ぞ憎しと思はんや。今日の事に思ひあはれれば。一人も棄よと

告給ひ一神應ふは侍難一玉嶋も過世より定れる業因と思ひ諦めく深くな歎たう此今
 棄らるゝと雖も老と養ふふ子あり。餓と凌に田園あり。寡にく何らんとも。人の妻とならん
 とも。心の隨と致べ一として。理と述て聞え知するよ。木綿妙に重て應ふべた言もぬく不
 覺も落涙とさりけ。玉嶋の情由を泣くく。と聞。涙うちかき。神應ふ仕まると宣ふと。と
 かく申さんやうの侍らす。是今生のおん別とこそ思ひ侍れ。あう何りとも。己が身いつてう
 他ふ伴れ侍るべた愛子と給りり田園を遣一給ふ上。ともうくえ一して守育時と侍侍り
 なん。親子兄弟乃契竭を。神も憐と見をぬいさば。よ一や影の年の經るとも。環會一給ふべ
 一と。健氣ふの應くも。おさどて泣なた袖の露。消が如た思ひあり。木綿妙に玉嶋が心の中と
 推量り。よと泣て聲と惜ます。健三を最不便ふのあれど。心よいくての思ひうへ一。きて村
 長とはじめ。郷人等に。玉嶋と浦二郎が事ととのみ聞え。船路より下らんとて。兩三日風と侍。
 遂は木綿妙。松太郎。俊平等を將。纜と解程に。郷人等も名残と惜み。これと送まば玉嶋
 の浦二郎をうた抱た。浪打際ほで送り出。さまが別の惜々れば。綱手に携て泣ふける。斯て

船子ども。追風よ一と罵るあひ。碇を引揚帆と立て。海原遠く船出せば。いと涙の玉嶋小
 稚兒えとも音なく。纜と引放され。撲地と倒ま。又身と起。渾の白帆の波間かくれ。見
 えむぬるほで目送れば。船の内も健三夫婦。遣は浦曲を見うへりて。眠えうち曇る潮けふ
 りと。霧さち人となりゆくふぞ。思ひ絶ても堪うねて。玉嶋を聲と發。いひ残一はる事もあり。
 うの船志む一歸てよ。と叫べ。共は浦二郎が。父と兄とが跡と追ひ。ささやうぬる手をあ
 げて。招きつ呼びつ母と子が。ほつふかひおた松浦湯ふ。打よるる波のうへれども歸らぬ人
 と思ひこぶ。數行の涙やる潮おし。げふや悲と死してわうる。今般より。生別こそ悲と
 けれと。昔の人の云々と。己が身ひとつの秋ふして。芦が花散る浦風。招たはくして。轉帳
 べ。郷人等憐て。さほく。よ云こ一らへ。家路は伴ひ歸りけ。されば瀬川健三が。佐用坂
 の社に祈。因縁遂は脱きを。粟と種て。粟と得。見えてぬ夢の迹を。今領巾庵山の名よ一
 おひ。玉嶋川の委な死。玉としてこに遣一おく。いとも奇一契りにこそ。

第二

陰陽贈答一て名初て香一



玉嶋松浦小
 子
 別離を悲む

玉嶋松浦小

二

大和言部卷之上

瀬川健三道孝の妻と子供と將て鎌倉に參着せしう。時頼入道對面あつて、彼等夫婦が年
 来の徳行を賞美を給ひ。を賜ひち祖父の流刑と宥免あつて、利新地百貫と宛行るよし
 御教書と給はりしう。健三も深君恩と謝し奉り、遂に鎌倉小宿所を營み、奉公他は草
 て、誠忠を盡したり。然るに兒子松太郎の、其性極て伶俐。年六つ七つのご時より、教ざるに
 文武の道は心をよせ、一度聞たる事と忘れず。父母は是と奇くとして、六藝と學するふ。弓馬
 細法の云も更なり。文學手跡その才は堪十歳ふ。詩と賦一文を作る。是も居易管三の風
 あり。然れども父これを賞美せむ。文の餘力の學なり。只士は武藝こそ肝要なりとて秘し
 て其才と人は語らず。こゝともて忝せし聞ゆる事なし。夫生死の賢愚邪正よらむ。顔回
 は短命よしして、盜跖の命長し。されば瀬川健三夫婦の、忠信徳行の聞えありて、絶する家と興
 をと雖も、惜べし。天これが爲ふ壽を授む。今茲文永六年の秋のご時。風のこゝちとて打卧た
 るが、藥餌もその驗と見せむして、夫婦うち續く。世と去しければ、松太郎の僅に十歳まで孤
 と取り、雜猿の枝に離れたる如く、追悼の涙乾く間なし。賢母玉嶋、弟浦二郎と云もの、松浦

にありとは聞えながら、生死定う取らず。父の元米物が少くて、木綿妙が志のびやうに消息
 して、安否を問んと云々れども、大に制して一さびも音耗せむ。骨肉の義久しく絶さり。只若
 黨村澤俊平のみ。よほづ信々しく傳きて、後の事なども、町事より行ひぬ。是より先、時頼
 入道の、弘長三年十一月廿二日、享年三十七歳、逝去あり。嫡男相模守時宗、父祖の箕
 裘と嗣て、武家の執權たりと雖も、未だ弱年なるよしよつ。思遇瀬川が孤、及ばむ。松太郎
 のやう十七歳に至りて、初て近習を召加られしう。を賜ひち松太郎と更めて、瀬川采女吉
 次と名告り。忠勤父彌まゝ、聊も私ふくいよ。武藝と勵む。文學と著み。君の爲の命
 と塵埃がども惜怖む。古老も既ふ其才を知く。當世無雙の壮佼なりと稱さるける。是のきて
 おた。こゝに、北條譜代の家臣、博多倍太郎素久が、從弟に、博多彌四郎素延と云ものありける。
 妻と娶て、十年にあまきども、一子ごになりしう。夫婦これと心うく思ひぬがら、その
 身嫡家ふあらざれば、深く後の事をえうらんどもせむ。よりて、味をる人あれども、養子をむ
 せざりけりある。文永二年の冬、ある夜彌四郎が、妻假寐の夢に、五衣に緋袴ある美女、

手に一面の鏡と傘を枕方近く立在。わらわも肥前國松浦縣に住むものぞ。あはしそふは胎
内と借りて。前生の因果と滅せんと思ふ也といふ。彌四郎が妻夢心よとて夫婦この年来
此ふ死事と歎れ侍り。えしとらわが胎内は宿り給ひ。歡び是はほそあどふしと答る。上
臈うち點頭。屏風の後に入るとおもへば夢さめたる。何まに不思議なれば。夫は此
事を物がさるは。彌四郎聞て。志む尋思し。彼美女。手は鏡をもちて。松浦のもの也と聞え
る。松浦佐用城の神靈あらん歟。件の社と鏡の宮と稱する事。神駈の佐用城の所持あり。鏡
と崇祀まはんと。豫てある人の物語にてあるぬ。こいやうあらんと云は妻はほそく怪
ぬ。かくて其年の終りより。彌四郎が妻有身あり。夫婦こよぬく歡びて。妻は毎月通が谷
の壽福寺へ參詣さ。安産の加持を受させたり。次の年。九月九日。彌四郎が妻を若黨關
兼七と云ものと。侍婢兩人と將。例の如く。壽福寺へ詣るかへさ。此日重陽なれば。寺の
西南歸雲洞の南なる石切山に登りて。野菊の花と摘んど。此山の巔に。望夫石と稱す。人
の形とる石ありけり。縁故と尋る。往時土御門院の元久二年六月廿三日。重忠一家。護者

の舌頭は係。滅亡ふ及べると。死重忠は二俣川の上ふ于て。流矢ふ中で死を。時小秩父六郎
重保。鎗倉ふあり。すあいち討手の兵士と。由比が濱に血戦。討死を時重保が妻。此山ふ
登り。夫の討る。望見。潜然として啼泣。自害して失さり。その屍化して石となる。
時の人。唐山の望夫石。我邦の領中鹿山の故事。擬。これとも望夫石と呼ぶといへり。さる
程は博多彌四郎が妻。只管興に乗。石切山の巔ふ登り。望夫石の傍りに至るとき。
忽地産の氣づけて。時刻速うらと見ゆるに。侍兒ども大は慌忙。いうせんとて立さ
ぐ。されど山中おれば。扶入まん家もぬく。すべたやうもあらざりし。若黨兼七。ひく
く物して。おのく。桂の小袖と脱。これ小松の間に引めぐらして。寐とさ。咲みどれ
る菊を折布て。とかく勸る程に。彌四郎が妻。安らか産。あ。玉と歎く。ばうり
る。女兒出生せり。此事壽福寺へ聞えし。寺より人と走。博多彌四郎はかくと告
る。彌四郎は且驚れ。且歡び。聽て迎の輪と。はうりて。宿所へ扶歸し。ける。母も子
も恙なくて。日を追。肥立けり。この兒重陽の日ふ生れ。あうも菊と折布て。襦よかえされ



博多弥四郎が
妻石切山の巔
望夫石のほとり
小て安産を

ほろふ石



壽福寺

若狭のみの七

七

ばとて。秋布と名づけさる。菊の異名を秋去の花といへばあるべし。夫菊も異名多た花
よて。唐山よこれ。佳友。壽客。節花。女華。女節。女聖。更生。陰成。傳延年。笑

曆金。日精。周盈。落蕃。黄花。帝女花。以上十五名。といふ。おのゝ出處あり。集めて余園用

が事物異名ふ載たり。又我邦よてい。菊と。ほさり草。百夜草。星見草。形見草。よひ草

ちざり艸。かゝるも草。あがね艸。かよもぎ。秋の花。ととめ花。いさて艸。山れ草

長月花。草の主。秋去の花といふ。えいほぐさふ

あさぢふもほぐさ葉もかるゝほで野よのこりけし秋去の花

この外證歌多し。又冬の菊を初見草。霜見草。のこり草。雪見草。以上二十名。といふ。藏玉抄裏

傳抄藻塩艸等よ見えたり。されば菊のめてた花よし。漢よ女節。壽客と呼び和よ少女花

ほさり草と稱て。霜は後るゝ花の標と。貞女のうへよ譬されば。今博多彌四郎が。女兒と菊よ

察りて。秋布と名づけし故あり。斯て彌四郎夫婦の。年米の宿望と果あ。今此女兒と舉

あうば。歡び思ふ事限りなく挿頭の花と愛慈む程よ。秋布二三歳よ及びてい。容止ほま

美しく。玉ともく刻成せる如くあり。さて彌四郎が妻。ある日夫よ對て。己が女兒の面影の

これが生るゝ年。假寐の夢に見る上臈よよく背て侍りといふ。彌四郎聞て。げよいいなるゝ

如く。彼が望夫石のほとりにて。生れしことなどと思ひあをされば。秋布の。松浦佐用媛の後

身よて存あるべたとして。いよゝ等閑ならず守育し。此女兒六七歳のころより書畫とよく

し。和漢の書籍と諳りて。詩を賦し。和歌と詠り。やと十二三歳よ及てい。文章その佳境よ入

り。謝女小式部よも取べからず。加之。教ざるゝ織織所爲とよく。戯れに機と立。錦

おどと織出まに。おのづら巧と竭て。意にまうせずと云ことおし。實よ是稀な。若少女を

り。父母の此形勢を見て。あまりに才の長さを怪と。えい短命よやあらんとて。筆のまきび

に心を勞る事と許さむ。秋布十五歳よ成ける。母の持病の積聚よ。遂よえかなく。お

りにけれ。ば。哀慕の涙やるかさおくて。詩歌のむのづらよ廢さりける。あうるゝ。執權時宗

朝臣の母公と。南殿とせし。うの性風流やうにむをるともて。才ある女子と愛しとま

ふあれ。秋布が事と聞及び給ひて。父の彌四郎よ仰つうにされ。内々の使をもて。頼よこれ

と召されけり。時は弘安三年五月五日。秋布の母の忌もきのふよき果さる。父の彌四郎南殿の御使と得。大に畏れり。俄頃秋布が衣服とかい繕ひし。輪添の侍婢二人。譜代の若黨關兼七と差副。南殿へ参りけり。斯く秋布の影の女中に引きつ。執権の母公は拜謁し奉る。その爲體よろづ禮節は稱。年来給事は老女と雖も及ざる所あり。南殿の目今秋布が言行のめでたたと齎して。近く召れ。そちが年いく程かと問給ふ。十五歳はなり侍りと申は。又歌の何の爲は嗜すと問給へば。まこし引退れ。

和歌の浦はいさらぬまでも紀の國やこゝ海あぐさのやまと言の葉と申せしかば。南殿を初め奉り。側は侍るもの。心あるも心なれも志むし感得て己ざりけ。浩處は老女一人。小四方ふ五把の粽と載ると捧えちて。おん前ふ参り。相州(時宗とまうは)の御方より。端午の慶賀として。進らせ給ひ。と披露されば。南殿見給ひ。時宗は近曾己れ政事に暇なくて。思ひの外は疎くおいせど。彼人いよく健おらば。これいほを歡びおし。殊更菅蒲の節句を祝ひて。此贈物あり。うれこおとへとて。ほどりちかく召よし給ふ。

は彼粽は短冊を着られたり。打うへて見給へば。その歌は

一	ち	か	死	や	六
二	ま	ち	う	き	七
三	ま	ち	う	き	八
四	ま	ち	う	き	九
五	こ	と	問	も	十
六	え	る	い	過	ぬ

とあり。數回うち吟ぐ大に感ぐ。宣ふやう。此歌ちまた五把まゐらる。いふ十字と句毎の上下によみ入れ。在五中將の唐衣きつとなれよと詠て。うたつむを句の上よとささる。五字に過む。

この十字の折句なれば。うれはも勝まり。時宗は連歌と嗜み給へど。和歌の聞えむ。殊更美事なれど。見もみれぬ手迹なり。日米近習の若殿原も。斯はては歌を詠出をべたものあり。も覺む。只それりと思はる。瀬川采女とやらんいふもの。和漢の秀才なりと聞及びはる。此ものにくや有るらん。さて詠さるものか。頻り賞美あつ。秋布が方と見給へば。秋布は今この歌と聞て。心は深く感吟。世も又かゝる才子のありけりと思へり。其時南殿秋布は宣ふやう。相州はほく。此秀逸と贈られさるに。返去せずの遺恨よこをあらめ少。

女己が爲。ちまた五把もてえやを。といふ十字と折句として。返歌いせうし。と仰るま
 ぞ。秋布の。この思ひうけを。とて。固辭奉ると。なほまばく。宣ひまると。深く推辭申さんも
 畏かるべしとて。やうやくに諾ひ申せしう。料紙硯と召ま。彼がほとりに置給
 へ。秋布は深く紫の煩ふ風情もなく。さらく。と書寫め。いとおさぬく侍り。とまうして。
 献ると。南殿文臺お受乘して。讀くごち給ふその歌ふ

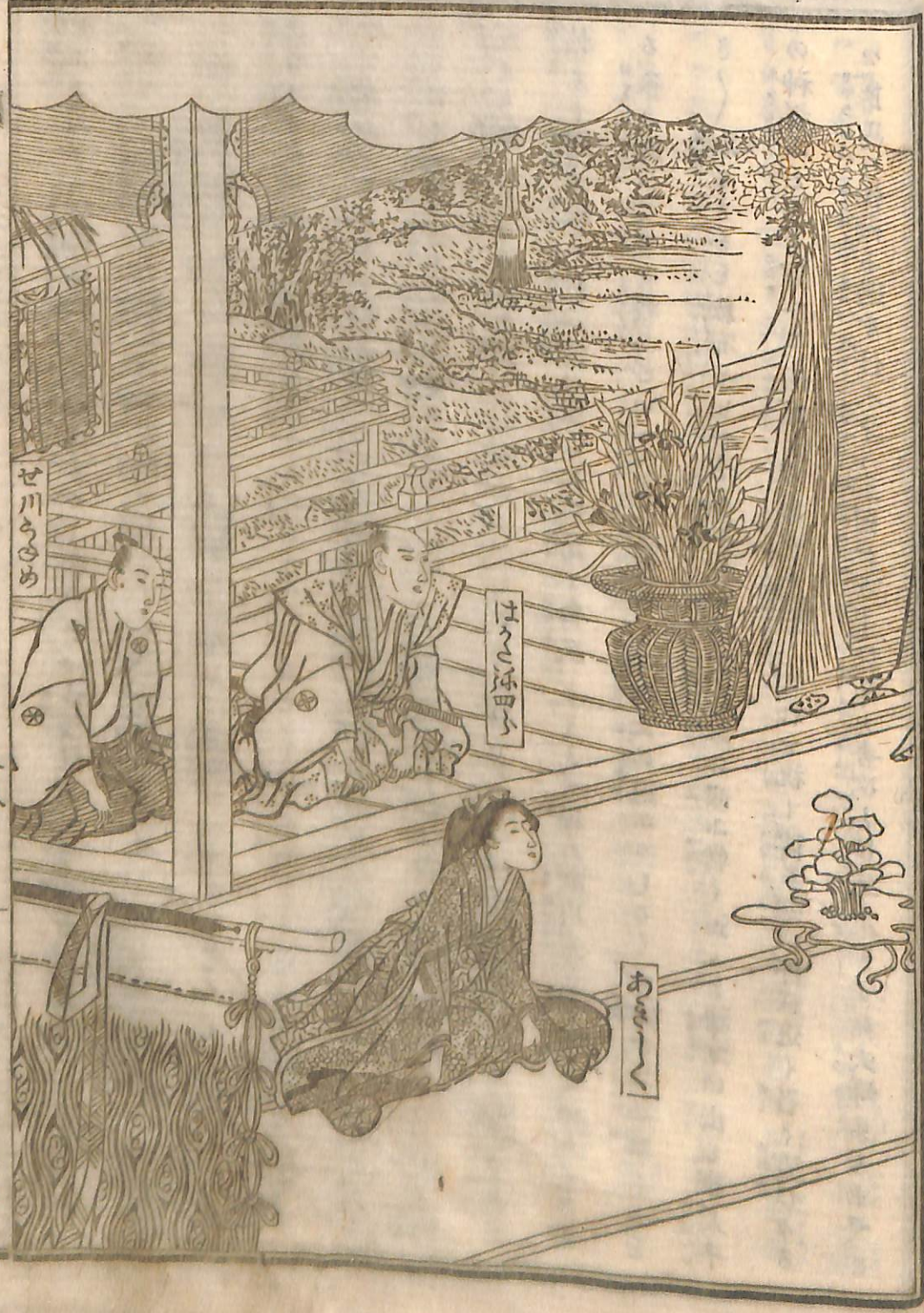
一	ち	よ	經	と	六
二	ま	と	猶	あ	七
三	さ	、	た	き	八
四	こ	れ	や	え	九
五	え	つ	ほ	と	十
六	え	つ	ほ	と	十

と詠たり。是又ちまき五把もてえやす
 といふ十字を句の上下に置く。歌乃心明
 らう。手迹又せふも愛さうりか。南
 殿まばく。吟めて賞翫初めの歌ふも彌
 ま。誠無比な兒才女なりとて。氣色うれ

り。よく見え給ひ。聽て件の短冊と文箱に入れて。相州の御方へ。返しおくら給ふ。この日時
 宗朝臣の。母公乃慰め。備いらせん爲。近臣瀬川采女吉次は。粽乃歌を詠。こよねた秀逸な

りと思ひ給ひさる。南殿よりも返歌ありて。劣らを勝らざる詠ぶりなれば。大に感心あつ
 く。汝も見よとて。吉次は彼短冊と見せ給へ。吉次も舌と巻て。此歌に驚嘆を。時宗又宣ふ
 やう。母公和歌と嗜み給へども。正風と好して。かゝる滑稽はようお給ひと覺る。手迹又
 自筆にあらず。且その筆勢。光明皇后の風あり。何ものう。己が母代奉りて。この歌と詠
 けん。いと不審もあるうな。われ面あさり。問奉らんと。宣ひ。此日の制度を。おし果て。

曉昏ふ及び。博多彌四郎素延。瀬川采女吉次のみを將。南殿お参り給へば。母公聽て對面あ
 り。瀬川の主の太刀を持つ。博多と共。麻のほとりに候。齊ま。頭と低たりける。其時々
 宗朝臣は。端午の慶賀と。還さ。ひて後宣ふやう。嚮小給ひりたる返歌。是れ愛さく覺え
 候。されど御自筆ならぬ。よつて疑ひあり。何人お詠し給ひさる。と問給へ。南殿微笑す。
 遣ふ博多彌四郎と見やり。彼歌と詠さるは。彼處ある男がひとり。女兒。秋布と呼ぶ。もの
 なり。あのもの。和漢の才女。錦おどさへ。よく織と聞され。けふ呼びよして。詠るに。人
 の申を。處虚言。おあらざり。と。初め詠さ。大和言葉の歌と聞え。おし給ふに。時宗



せ川らめ

たのぼり

おのり

十八

東京金屋町反土



和歌の贈答
ふよつとく
瀬川秋布
執権家小
賞美
甘らる

北條時ひのちん

母公みさの

大糸言...

朝臣まほしく甘吟あつて。彼秋布とやらん。尤も退出候ひし。面あさり見まわさくこと
と宣へば。南殿答へ。彼はは次の間侍り。とくく秋布を召せ。と宣ふ。女中むら心と得
く。聽く將を参りし。時宗朝臣。秋布を見給ふに。標致さへ世に比なく。ものゝいひさほ
風流やりに。まう元禮儀ふ缺たる處なれば。ほましく賞美あつて。近くめいよし。響の返
歌と愛おぼきよしと聞え給へば。父の彌四郎は云も更なり。秋布の面目身ふあまりと見え
たりける。斯の如く執權の氣色よほし。たと見く南殿。深く歡び給ひ。時宗朝臣ふ宣ふやう相
州より贈られたる歌も。別ふ詠人あるべし。まらし給へと宣へば。時宗朝臣。遙小瀬川采女と
指まて。件の歌。彼壯俊が詠たる也。聞し食及るまよ。渠小瀬川采女吉次といふものな
る。稚き時ふ父母を喪ふといへども。天才ふ。文武の道ふりしこく。當時の諸名家ふもを
さく。恥るとおし。秋布といひ吉次といひ。時宗執政の世に當る。かゝる秀才の出る事。太平
の神祥ふころと宣へば。南殿まう。應く。これと祝。博多彌四郎は近く召く。宣ひたる
の。良馬の伯樂ふ過む。佳人才子ふ因がさ。秋布と吉次とは。年庚もよ。夫婦あらずや。こ

の公だち。云事ふ。あらねど。親の心ふあるべ。たかりと聞え給ふ。吉次は秋布も既ふ其
才は。今又初め。面状あ。送ふ。指難。思ひある。南殿かく。宣まれば。忽地面報
やうになりぬ。其時彌四郎。南殿ふ申は。やう。僕子といふ者も。只この秋布のまよはあれ
ど。女子なれば。家と嗣をべくもあらむ。吉次が父母は。徳行の聞えあつて。絶たる家を興し。そ
の子又文武乃才子なるに。かゝる仰をうけ給ひりて。いうで。黙止候べ。されど秋布の。や
う十五歳ふて候へば。其期おほ。少いは。今一兩年を。經候。必ず。婚嫁と。とり。締候。べ
と申よ。南殿の吉次とも。近く。呼ま。秋布と共に。酌を。とらし。やがて。相州。小孟と。勸給ひ
たり。斯て。時宗朝臣の。初更の。比及。小席と。辭し。博多。瀬川と。將て。退出。給へば。秋布も。暇を。給ひ
りて。宿所へ。ぞ。歸り。たる。

第三

恥と知す。て。大。辱。候。得。たり

五指の。か。い。る。く。に。彈。ん。より。一。拳。ま。あ。り。ず。瀬。川。采。女。博。多。秋。布。が。和。漢。の。才。ま。長。さ。る。と。執
權。御。母。子。一。と。さ。び。賞。美。あ。り。し。より。そ。の。名。忽。地。高。く。聞。え。て。近。國。ほ。で。も。か。く。れ。か。く。其。詩。歌

拭需るもの。門前ふ市とさうり。然ども瀬川采女も。毎日の出仕は厭ふ。とてろの需に應
ぜむ。秋布の推辭に據。おくく。十とびふ一度の脱き得む。筆と事事も多うりけり。こくに又
北條家の内管領。長崎平左衛門尉頼綱が甥。鼠川嘉二郎武行と云ものありけり。其身執
権の近習ふ召使る。と雖も。心よからぬものなれば。伯父頼綱これ状見かざり。内々義絶去
くよせ流けむ。時宗朝臣も。彼が便佞あると志り給へむ。折をもて速ぎけんとかほせども。お
ほ不便と加え。形の如く召流くられたり。件の嘉二郎の。心ざほのよからぬのミ取らす。推
き時ふ。友どちと雙陸の目と争ひ。廻あふて樓より落けるが。過ぎ左の足を折た。右の眼と
突潰去々。遂ふ一目。蹇の醜郎と取りぬ。あうれども。其醜れふの羞む。殊更に色好
お於男ふてあり。かバ秋布が才色の比なを傳聞て。見ぬ戀ふあくがれ。ある日腹心の草
鞋奴。荒石勘八と云もの。只一人を俱して。博多彌四郎が宿所ふ至り。明白に名告りて。齋太
る扇をとり出。これふ秋布が詩歌と需けた。此日主人彌四郎の。出仕志家ふあらず。若
黨兼七とり次して。かくと告る。秋布のよく。聞て兼七にいふやう。鼠川の内管領長崎

氏の甥なるより。豫て聞ぬ。彼人ミづから来たりて。己らにが墨跡と需給ふに。推辭の無禮
なり。それよよろしくいひこころへて。あむいほさせよ。己が身今四五枚の短冊と書をいり
て。ろの扇ものをまべ。と云に。兼七の心得果て。嘉二郎を客房ふ請り。己びしくはおのまべ
たが。次第ふよりて寫め候へ。且くおん待あるべしといひて。次の間へ退たけるが。ほてど
もほてども音もせず。嘉二郎鹿忽の壮俊なれば。大い倦座に堪む。或る蒸襦ふ立よりて。晝
を膳め。或の網代天井の目と算。彼此を徘徊去。思ひをも廊下傳ひ。秋布が居室の好と
りに到り。と見れば。紙障の細やうにひらたさるあり。此處こそ。彼少女が居室ならめと。精
ま。短た片足と翹。只隻ふる眼と斜よりて。閑窺れ。秋布は餘念もなく。机まかして。筆
をふるへる。形容待宵に蜘蛛と詠いたる。衣通姫。月の前ふ源氏を作り出せし。紫式部あり
とも。これふの過ぐと見る程。己れもあらずで足のすくむと覺む。秋布は。人のけいひをる
とあれども。聲ともせず。竊ふその人を見る。眼一つよて片足の蹇さ。これおん鼠川嘉
二郎あるべ。とい。衣服の紋おどに。推量られ。かバ。心の中にそのおめげあると。憤。驚

かきむやと思ひく。咳高あはれくして。立たんとするおもちと見せければ。嘉二郎かじらうも周章あわてつゝ
舊もとの處へ立たかへり。義七よしかと呼よび出して。あまりに待まちびびり。扇あふせのいかゞあるやらんと云いふ。義
七よしかいぶせく思おもひて。再またび秋布あきふがほとりに行ゆて。如此まくありといふ。秋布あきふの。嘉二郎かじらうが無な禮
なるを憎にくむと思おもひく。うれといふに。件くだんの扇あふせと打うちひらた。

東路あづまぢ乃多度のたど迺瑞の雜が名な背か你に互て愛え瀧た詩の神かみ乃行の惱お鴨やひ

と。万葉假字ばんやうがも。草書さうしよよさうく。と書か果はくどらうける。と義七よしか客房きやくにも。と死して。嘉二郎かじらうに
通わ與たせし。嘉二郎かじらうのその扇あふせと見る。能書のうじよのはし書がさながら飛花ひくわら落葉らくえつの如ごとくおれば。
萬葉ばんやうと見みむ。草書さうしよとあらざるもの。いかでか讀よくどは事ことと得えん。されと思おもふ人の筆ふでの迹あとな
れ。御教書みぎやうしよより珍おんちやう重みし。義七よしかに厚あつく歡よろこび聞きえ。扇あふせと懐かよし。勘八かんを將いく。おのが宿所しゆくしよ
歸かへりぬ。あうしてより。嘉二郎かじらうの。毎日まいにちに件くだんの扇あふせを弄み賣うし。これよりの需もとめざる。と秋布あきふが方かたより
贈おくりこ承こたり。と詭いつりを。自誇じこする事こと傍たがひ若無人わがにんあり。あゝに嘉二郎かじらうが隔へだてた友とも。長城野兵太ちやうじやうひやうた
敦宗あつむねと呼よぶ。原是もとこ京家きやうけの侍さむらひ。將軍せうぐん惟康親王これやをしんわうの雜色ざつしきふるが。生學なまがく問とせしものなれ

バ。件くだんの扇あふせと見て冷咲あざわらひ。鼠川ねづがわ氏うぢの。おどて斯か忌い々まく。たもの。と秘藏ひざうを給たまふ。と問とふ。嘉二郎かじらう
も又また呵から々くと字わらひち笑わらひ。美人びじんとほく。これと贈おくりしもの。と忌い々まくといひ給たまふ。猶なほしと思おもひ
て。おらん。これかく世よの女子をんなに慕まるゝ事こと。是非ぜいひの及およぶ所ところなり。とて。鼻はなのあざりとおどめう
いつゝ。なほおこりが。回わ答たするに。兵太ひやうたいよく冷咲あざわらひて。足下あしもとに。此歌このうたを何なにとて讀よみ給たま
ひ。と問とふ。嘉二郎かじらう忽たち地ぢ疑ぎ念ねん發はて。歌うたやらん。詩しやらん。これ實じつし一字いちじも得え讀よむ。ねがはく
の解とまらし給たまへといふ。兵太ひやうた聞きて。さればこそ。欺あざむか給たまへり。ほづ歌うたの心こころと申まべ。東路あづまぢ乃多
度のたど迺瑞の雜が名な背か你に互て愛え瀧た詩の神かみ乃行の惱お鴨やひとは。多度たどの桑名いわなより乾かたの方かた。三里さんり許りありて。多度たど太神たいじん宮みやうた。せ給たまふ。祭
の神かみ。天津あまつ比古ひこ禰命ねのみこと。并そのと其御子そのおんこ。天目あまのめ一箇ひとつ命のみこと。世俗せぞく一目連ひとめづらとまう。は。かれ。足下あしもとが眼まなこの隻
あるに比たて笑わらふ。又また愛瀧あゐた詩の神かみ乃行の惱お鴨やひとい。愛瀧あゐた詩の攝州せつしゆ西宮さいみやう大神おほいじん宮みやう。三年さんねんが問と足あし
の。立たざりし神かみなれば。是こゝ又また足下あしもとの片脚かたあし短たく。磨たへ。笑わらふなり。あうると人の速すみく讀よみ得えざるやう
に。萬葉假名ばんやうがも。草書さうしよに。のせ。か。か。熱あつく斯かれ給たまへり。あ。笑わら止しや。とて。又また審あみ。解とま
せ。嘉二郎かじらう勃は然ぜんとして。怒氣いかり心頭しんとうを發おこり。件くだんの扇あふせと搔か取とえ。む。む。とむんと引裂ひき捨す只ただ隻



かる晴と睜ひは。皓齒はくしと切き。つゝ云いやう。彼畜生かのちくせい。何の恨うらみもなた。これを辱はづかしむる事斯ごとの如ごとし。
 いうよして此恥このはがを雪ゆんとて。いたまき高く罵ののしると。兵太ひやうた急いそし。思おもふに。秋布あきふ。虚名うそなと高たかうて。俗子ぞくしを欺あざむく。此ちの文才もんさいありとも。これを謀はからん事ことの。最易いそやすし。思おもふに。秋布あきふ。虚名うそなと高たかうて。俗子ぞくしを欺あざむく。のまじ
 れん。詰問あじりごととせば。絶たえく口くちと開あかまべうらす。這奴しやつ。恥辱ちじくと與あて。足下あしもとの爲ため。冤うりやを誤あさん
 事こと。兵太ひやうたが肚裏はらのうちにあり且かつ怒いかりと忍しのび給たまへ。されどこゝの端はし近く。閑談かんたんをおまによるしから
 す。與あほりたる處ところへ伴ともひ給たまへ。謀はかりごとを謀はかま申まをさん。と最信いそまだちていふ。嘉二かじ郎らうこれと聞きて少すこし
 氣色けしきを和やわら。聽やがて兵太ひやうたと閑室かんしつに誘いざなひ。勘八かんぱちといそがして。酒肴さけさかと安排あんぱいさし。送たがし。盃さかずきをまがし
 つゝ。密談みつだん數刻すこくふ及びおよびけり。抑おさく。長城野兵太ちやうじやうひやうた。敦宗あつむねの此ちの文才もんさいあれども。元米もとこめ。曲子くしなれば。博
 覽みか深く考かんがふこと。いようせむ。まづうらその才さいを放はなして。人の短みじた。と説とか。のれ長たけたりと誇ほこる。
 嗚呼おこの白物しろものなれば。常つね人ひとと直下みくだして。これよほまものおと。おもへり。されば同氣どうき相求あひまめ。
 同病どうびやう相憐あひあはれ。鼠川ねせがわ。嘉二かじ郎らうと親したく交參まじりあひ。不良ふりやうの行ゆきひ多おほかりけり。さる程ほど。嘉二かじ郎らうの。次つぎの日
 出仕しあつし。君邊くんべん。人ひとあき折をりを伺うかがひ。時宗ときむね。朝臣あそみに申まをやう。實まことやらん。博多はかた。彌四やよ郎らうが。女むすめ兒め秋布あきふの。

人のえ。あらぬ古ふるた詩歌しうかと竊あひ。或あるひ引直ひきなおし。あどして。虚名うそなと高たかうせんと謀はかり。ものへ。さる
 よよつて。詠出やういづる歌うたなども。古風こふうあり。近體きんたいありて。格調かくてう定さだりならず。况いはんや。和漢わかんの古實こじつなどは。露
 むかりも。己おのたまへ候まをぬを。己おのが君きみ御ご女子し深ふかく賞せう翫くわんを給たまふ事こと。傍かたはら痛いたいとて。密ひそし。肩かたと擧ある
 もの。候まを。と誠まことし。やうよ申まをければ。相州さうしゆ。聞きて。微笑ほゑ給たまひ。昔むかし。小式部こしき部の内侍うちわかしが。年十二三としじふさんの。こゝろよ。
 よた歌うたどもと詠よか。か。人ひとこれと疑うたがつ。母ははの和泉式部いづみしき部よ。ほをるならんといへりしと。まづ
 からは。いと朽くちと。く思おもひ。さるよ。あると。た彼かの。小式部こしき部が。定頼さだたより卿きやう。大江山おほえやまの名歌なうたと詠より。けた
 ると見て。人ひと初はじめて。疑念ぎねんと散ちせり。と。今いま。亦また。秋布あきふを。擧あるものも。その類たぐひからん歎なげ。こゝね。さし
 と思おもふもの。と。讒さかしらならん。己おのれ。日米ひこめ。彼かのが。詩歌しうかと見るよ。その才さい。古人こじんの。精粕せいぱくと。嘗あら。非あらず。
 殊こと。小粽こむすの。返歌へんがなどは。當意たうい。即妙そくみやくといふべし。何なにもの。うか。さる事ことを。申まをす。と。問と給たまへ。嘉二かじ
 郎らう。畏おそて。其人そのひとの。聞きえ。あ。げ。難がたし。論ろんより。證しょう。據こと。申まをす。の。候まをへ。判はん者じやを。立たてられ。和漢わかんの。文才もんさいあ
 るもの。よ。仰おほせ。秋布あきふと。問と答たさ。これと。試こころと。給たまへ。事ことの。づ。ら。分明ぶんめい。候まをらん。うと。備まもく
 げ。よ。申まをせ。う。相州さうしゆ。か。さ。ひ。て。秋布あきふと。問と答たさ。せんもの。何なに人ひと。う。あ。ら。る。べ。う。ら。ん。と。實まこと。

ふ。嘉二かじ郎らう答こたへて。惟これ康か親しん王わうの雜ざつ色しき。長おさ城まき野の兵ひやう太た。和わ漢かんの才さいあり。此このえのやあるべうらんと申まをす。其その時とき々々宗しゆん朝あそん臣しん。この嘉か二じ郎らう等らが秋あき布ふとねとくもひひ。兵ひやう太たと謀まをしあいしし。斯かに云いふと猜そい志し給たまひ。憎にくさもふくしどおぼせしうば。うち点ちゆう頭づて。兵ひやう太たが事こと。これよくありぬ。實じつ此このものよ活かしかりぬん。時とき宗しゆん思しひ候て。彼かの女を子ごと賞せう美びし。虚きよ名なを高たかうせしなんどく。世よの人ひとふひ誹ひ謗ぼうせらるるこそ安やすからね。さらば近ちかたふ必かならず彼かれが才さい學がくを試こみて。己おのが恨あやまちあるべきと。と宣のたまひしが。次つぎの日ひ博は多た倍ばい太た郎らうと以もつて。緣この由よしと母は公こうに聞きこへ給たまふに。南みな殿だんのを。嘉か二じ郎らうが申まをす處ところ。大おほ人ひと志こころからずとうち腹はらさて給たまひとづから判はん者じやとなつて。勝せう劣れつと。批ひ判はんをべし。但たゞ漢かん土どの故こ實じつふ于てい。別べつ判はん者じやと立たてて給たまべたらう。と回いら答へ給たまひ。ふたれば。時とき宗しゆん朝あそん臣しんをおいち建けん長ちやう寺じ。此この大たい覺がく禪ぜん師しふ。まうぐのよしと仰おほせられ。和わの故こ實じつは。南みな殿だんのとづから判はん者じやとなり給たまふべし。漢かんの故こ事じはつてい。禪ぜん師し批ひ判はんせらるべしとなり。さて問もん答たうの日ひと定さだめられ。彼かの頃かた博は多た彌や四し郎らうと長おさ城まき野の兵ひやう太たと召めして。件けんの仰おほ事じあり。彌や四し郎らうを某そのの日ひ。某そのの時ときふ。女むすめ兒めを將いて建けん長ちやう寺じへ參まゐれよ。彼かの寺てらふ于て秋あき布ふが才さい學がくの程ほどと試こみつべたらう。と聞きこえ給たまひぬ。事ことの爲ため体たい既すで小せう晴はれ

がましくぞ。なりふけは



松浦佐用媛石魂録前編上終

